# 物流業界、「総合物流」実現へ対応

グローバル規模での経済競争が激しくなる中、物流業界は単にモノを運ぶだけではなく、産業や生活の場へ届けられる価値を提供することに主軸が置かれるようになってきた。つまり全体最適とグローバル化するサプライチェーンの効率性と持続可能性を高めて、安全・安心で高品質な物流網をきめ細かく整備していく「総合物流」への対応が求められている。

## 注目浴びるメキシコ

### 北米との航空輸送強化

「総合物流」の一環として、物流業界からの提案を受けて産業界では今、環境負荷の少ない鉄道や船舶へと輸送モードを変える「モーダルシフト」への動きが浸透してきている。また航空貨物関連では、輸送スピードが必要な高付加価値製品を取り扱う輸送網の拡充のために、積み替えを行うための拠点拡充や新規路線の開設、新規貨物獲得に向けたハブ拠点整備といった動きも顕著になっている。

そうした中、物流業界の最大手である日本通運では、モーダルシフトのさらに一歩先を行く施策として、「e－AWB」を導入することを決めた。

e－AWBとは、航空運送状（AWB）の電子化により、従来は紙媒体で行っていた事務作業の効率化と、紙使用量の大幅削減を目指す取り組み。同社は日本航空（JAL）との間で、シンガポール向け貨物について、e－AWBを導入することで合意、運用に乗り出した。

同社とJALは今後も、e－AWBの導入路線を順次拡大して、業務の効率化とサービス向上につなげていく方針だ。

また物流業界で今、ダイナミックな動きをみせて、注目を浴びるのがメキシコ。日系自動車メーカーが同国への進出を本格化する中、米国やブラジルとの間で部材・製品を流通させたいとの需要が増加。これを受け日系物流企業がメキシコで、自動車部品メーカー向けの航空輸送事業を強化している。

同社は現地航空会社のアエロユニオンと提携、同国レオン市（グアナファト州）と、米ロサンゼルス市の間に貨物便路線を開設した。

郵船ロジスティクスは他社へ委託していた空港内貨物での貨物仕分け業務を内製化、作業品質やコスト低減につなげる。メキシコでは完成車の生産拡大に伴って、日系部品メーカーの進出も加速しており、両社は細やかなサービスを訴求して顧客の獲得を図る。

グアナファト州では、日系大手車メーカーのマツダがサラマンカ市で乗用車組立工場を稼働させているほか、ホンダもセラヤ市で四輪車の第二工場の操業を始めている。日通や郵船ロジは日本および北米から部品を急いで送りたい需要も出るとみており、今後も航空輸送網強化に取り組んでいく。

また日本通運は今年中に、同じメキシコで鉄道貨物輸送サービスに乗り出す。具体的には同国の鉄道運行事業者と連携し、メキシコ－米国間を定期コンテナ便で結び、自動車部品などを輸送する。メキシコの鉄道網は中部のサンルイポトシを起点に沿岸の港湾都市につながっているほか、北上すると米国の鉄道網にもつながる。日系の物流会社として、メキシコで鉄道貨物事業に入るのは初めて。大量の貨物を低コストで効率よく輸送できる鉄道の物流網を構築し、輸送サービスを強化する。

同社はサンルイポトシに、倉庫面積5000平方㍍の物流施設を開設。この施設は、外国貨物のまま輸送できる保税地区にあり、関税などコスト面でもメリットがある。サンルイポトシを起点に、現地の鉄道会社が運行している貨物列車に同社のコンテナを搭載して、定期便としてのサービスを展開する。

メキシコの鉄道網はサンルイポトシから北上すると、米国の鉄道網に連絡。自動車関連企業が集積するシカゴなど、米国中西部地区と結ぶことができる。東側の港湾都市アルタミラ、タンピコ、ベラクルス、西側港湾都市のラサロカルデナスのほか、国境付近で物流拠点となっている米テキサス州のラレドにもつながる。

同社では北中南米における陸送事業として、カナダ・トロントから自動車産業が集積する米国、メキシコの各都市を結ぶトラック輸送網「XB3300」を展開している。今後は荷主のニーズに合わせ海上輸送、トラック輸送に、今回の鉄道貨物を組み合わせた複合サービスの提供も可能になる。

日系物流会社はメキシコで事業拡大を進めている（日本通運がグアナファト州に設けた物流倉庫＝日本通運提供）

メキシコから米国に出荷される現地生産車＝マツダ提供

## アジアで拠点拡大

### 新会社や連携 動き加速

ＡＮＡカーゴは沖縄・那覇空港の貨物拠点「沖縄国際物流ハブ」を活用している

アジアに目を向けると東南アジア諸国連合（ASEAN）の中でも、今後の経済発展が期待されるミャンマーでの動きが注目される。郵船ロジスティクスでは、現地法人を設立、営業に乗り出した。具体的にはヤンゴンに現地の物流企業シルバーバード・ロジスティクスと組み、合弁会社を設立。資本金は30万㌦（約3070万円）で、郵船ロジスティクスのシンガポール法人が70％、シルバーバード・ロジスティクスが30％を出資。急速な民主化と経済改革が進むミャンマーでは物流需要が高まっていることに対応、現地法人を核に航空・海上の貨物輸送や国内輸送といった総合物流サービスの展開に乗り出した。

同社では2011年からシルバーバード・ロジスティクスを通じてミャンマーで物流事業を展開してきたが、この現法設立で事業を本格化。ミャンマーは衣料品や雑貨などの生産が拡大しており、生産拠点の設立はこのミャンマーに今春、現地法人を設立、営業に乗り出した。具体的にはヤンゴンに現地の物流企業シルバーバード・ロジスティクスと組み、合弁会社を設立。資本金は30万㌦（約3070万円）で、郵船ロジスティクスのシンガポール法人が70％、シルバーバード・ロジスティクスが30％を出資。急速な民主化と経済改革が進むミャンマーでは物流需要が高まっていることに対応、現地法人を核に航空・海上の貨物輸送や国内輸送といった総合物流サービスの展開に乗り出した。

同社では2011年からシルバーバード・ロジスティクスを通じてミャンマーで物流事業を展開してきたが、この現法設立で事業を本格化。ミャンマーは衣料品や雑貨などの生産が拡大しており、生産拠点の設立を検討する日系企業も増えている。同社は13年にカンボジアで現地法人を設立しており、東南アジア各国の物流網を生かしてトラック輸送にも注力していく。

また中国に新たに拠点を置くのは山九。同社は中国の繊維大手である青島即発集団と物流業務を運営する合弁会社、青島捷順利達物流を設立し、物流センターを12月に開業する。敷地面積1万9210平方㍍、倉庫面積1万2600平方㍍。これまで日本に輸出してから行っていた検品・検針の機能を中国に集約し、製品を直接販売店などに配送するダイレクト納品やリードタイムの短縮につなげ、コストも低減する。

新会社は流通加工の受託だけでなく、日本における輸入貨物の取り込みにつなげるなど、新たなビジネスモデルの構築を目指す。

同じアジア市場をにらんだ動きでは、ANAカーゴとヤマト運輸が、沖縄・那覇空港の貨物拠点「沖縄国際物流ハブ」を活用し、貨物路線の拡大や冷凍・冷蔵品の宅配便である「国際クール宅急便」事業の拡大・強化を図っている。

これは、ANAが沖縄－シンガポール線を就航したのに合わせ、ヤマト運輸が今年中に国際クール宅急便をシンガポール、台湾にまで広げるもの。両社は共同して陸送から航空輸送へのモーダルシフトを進めるほか、冷凍品と冷蔵品を合わせて詰める専用コンテナを開発する。

ヤマト運輸は国際クール宅急便を香港で展開しており、冷凍・冷蔵の生鮮品などを翌日配送している。14年中にも冷凍・冷蔵品をシンガポールと台湾向けに翌日配送するサービスをはじめ、日本全国の農産品の通信販売を拡大したい考え。

一方のANAは、5月に10機目となる貨物専用機の運行を開始。就航地点は09年10月の沖縄国際物流ハブ供用開始時の8地点から12地点にまで拡大。15年度はさらに貨物専用機を1機増やし、ベトナムや中国などを中心に、就航地を増やす方針。

山九の青島物流センター

日系企業初、タイ・マレーシア間を縦断する
日本通運の鉄道輸送サービスが始まりました。

「アジアでもクロスボーダー」
日本通運は、タイ・バンコク＝マレーシア・クアラルンプール間において
日系企業初となる国際鉄道輸送サービスを開始。
全長1600km、この定期的かつ大量輸送を可能にした鉄道コンテナ輸送誕生
により、私たちは、ASEAN経済共同体実現に向かって今後ますます増大する
東南アジア・東アジア地域での物流ニーズに即応してまいります。
豊富なノウハウと高品質なサービス体制で、国境を越えてあなたのビジネスを
フルサポート。さあ、私たちとアジアへ、世界日通。日本通運です。

お問い合わせは最寄りの日通へ
0120-386-522　世界日通　検索

日本通運 NIPPON EXPRESS